

れている用例に比べて最も早く、発見と言えよう。

第三章は「平安鎌倉期古辞書の語彙」。世の古辞書の中でも百科事典的な性質をもつ類書「塵袋」所収の〈雪恥〉〈付驥尾〉〈弁蛙〉の訓みの変遷、「類聚名義抄」「沙石集」「雑談集」の形容詞、同じく「類聚名義抄」中の類義語、〈定訓〉と古辞書の語分類などについて述べる。現在、一般的に訓み習わしている言葉は、必ずしも伝統的なものではない。例えば、「ハジラスグ」と訓まれている「雪恥」は、中世以前には「ハジロキヨム」という訓みがむしろ一般的であったことなど、門外漢にも楽しめる記述も多い。記録中での意味、用法の変容の過程の観察や分析によって見えてくる、語彙をそれぞれの通時的な姿の解明などは、著者のみならず、他の研究者にも興味がかもてよう。

なお、著者は本学大学院卒業生。巻末の各種索引が充実していることも書き添えておく。(一九九五年九月 東苑社 A5判 四〇三頁 一四〇〇円)

—大学院前期課程在學生—

る。これまでの荷風像といえは明治文明批判、江戸文化鼓吹、父子相克といった用語で捉えられていたらしいがあるが、氏はこのような言葉から「いかに脱却するか」ということを課題として荷風研究を進めてこられた。その解答として「文学と音楽の結び目に目を凝らし続けていた」作家永井荷風、音楽という「女神(ミューズ)」に魅惑されたあらたなる荷風像の確立という結果がここにある。なお氏の「永井荷風 オペラの夢」(音楽之友社)をあわせて読まれることをおすすめしたい。(一九九五年一月二〇日 勉誠社 A5判 三九四頁 定価四、九四四円)

—大学院前期課程在學生—

堀江信夫著

「常世の国茨城」「高村光太郎論」

疋田雅昭

前者は、その名の通り、茨城県の風土が日本文学上においてどう描かれてきたかというテーマにもついで書かれたものである。しかし、そこにあるものは単なる一地方の風土がわが国の文学上においてどのように描かれてきたかという報告ではない。

松田良一著

「永井荷風 ミューズの使徒」

嶋田直哉

本書は松田良一氏の昭和五四年から平成七年までの永井荷風研究とその周辺を収めた二十の論考から成り立っている。第I部では「初期作品論」と題する荷風の本職会時代の検討に始まり「あめりか物語」「ふらんす物語」「西遊日誌抄」など外遊時代を題材とした作品群、江戸名所を語る「日和下駄」、代表作といわれる「腕くらべ」「瀬東綺譚」そして戦後に刊行された「踊子」までの作品論が収められている。氏はこれらの作品を「断腸亭日乗」はもとより同時代の新聞、雑誌、あるいはラジオ番組にまで注意を払い、詳細な実証的調査を経た上で論じられている。よってそのどれもが非常に説得力のある論文となっている。特に「瀬東綺譚」論では当時普及していたラジオの台数及びその型、番組にまで目を配り、当時荷風が陥っていた「美意識の危機状況」を指摘した上で、舞台となる玉の井という都市空間を銀座と比較して見事に構築されている。また「瀬東綺譚」論に限ったことではないが、第I部を通し

て「音」の描写に細心の注意を払って分析している点は大きな特色の一つだろう。「音」といってもラジオから聞こえるものだけでなく、風の音、話し声、水の音などテクストから読み取れるあらゆる「音」を拾い出し、背景ならぬ「背景」といった世界の分析は氏のユニークさが光るところである。

このような実証的研究をさらに発展させ、作家永井荷風に迫ったものが第II部である。ここでは荷風を囲む状況、例えば唯一の親友といわれる井上喆々の家系やその句作、木曜会と深い関係のある雑誌「蘭舌」「ハイカラ」の内容紹介、そして最も注目するのは「リヨン時代の荷風」「永井荷風とオペラ」と題された二つの論文である。氏はリヨン市立図書館蔵の新聞資料と「西遊日誌抄」をつきあわせながら一つずつ演目を確定させている。このような実証的調査はこれまでの荷風研究では全く触れられていなかった分野であり、氏の的確な分析が随所に感じられるところでもある。

このような実証的研究の他にも文学史における永井荷風の位置、同時代の文学状況などの考察も収められており、氏が述べられる荷風像が非常に理解しやすい構成となっている。

本書は茨城県の自然を山、川、湖沼、海岸とに分け、その地を舞台にして描かれる様々な文学が紹介されている。そして、そこには「常世風土記」以来の豊かな文学の伝統を感じさせられる。しかしそれ以上に、それらの文学が自然と共に生きて来た文学であることを感じさせられるのである。茨城県には、他と異なった独特で豊かな自然があるようだ。そして、そこに住む者や、そこを訪れた者たちの文学作品には、我々の忘れてしまった、自然との親しい関係が描かれているのである。(平成八年一月六日 茨城図書 二一六ページ 一四〇〇円)

後者は、詩人高村光太郎の人生・作品、その時代とともに追った本格的評伝である。よって始めて、光太郎に接する読者にも、よき案内となろう。しかし、本書はそれに加え詩人としても、生活者としても、現実に妥協せずに、孤高の人としてその人生をまっとうしようとした光太郎の人生が、不思議に、日本近代そのものの歩みと軌を一つにしていることを教えてくれる。

彼の出發した大正という時代は、詩においてもまさに、混沌の時代であった。口語自由詩運動に加え、様々な新芸術の流入、そんな

中で、彼の詩の「道程」は始まったのである。確かに、大正の自由主義、昭和の天皇制国家の国粹主義、そして戦後の民主主義と、様々に変化する時代に合わせるかのよう、光太郎の詩風も変化していった。まるで、時代におもねっていったようである。

しかし、いかなる時代においても彼の「自我」は、無批判に時代におもねるのを許さなかった。彼の変化は、「特殊国の特殊な雰囲気」とたたかった結果なのである。しかし、対峙するが故にその時代の特徴を最も、色濃くやどすものになってしまったという、堀江氏の指摘は、あらためて戦時下の光太郎の詩を考え直してみる上でも重要な指摘ではなからうか。そしてさらに、光太郎の七十四年の人生を通して我々は、それぞれの時代の典型的な日本人の様なものを見ることも出来るのではないだろうか。本書は、一九六六年の「高村光太郎」(清水書院)以来の、氏の三〇年の集大成である。(平成八年二月五日 おりふり 三七三頁 一万八千円)

—大学院前期課程在學生—